

経営学方法論としての三段階アプローチ 試論

井上 隆一郎[※]

はじめに

2008年の益川・小林のノーベル物理学賞受賞の記憶はまだ新しい。日本の物理学界の世界的なレベルの高さは長い歴史を背景に持つ。今回の受賞の対象になった論文が30年以上前の業績だったこともさることながら、湯川秀樹、朝永振一郎など、戦前からの量子力学研究者が複数受賞していることからそのことを感じずにいられない。この長い歴史の中で日本人として最初、そして二番目にノーベル賞を得た湯川、朝永の研究に影響を与えたといわれているのが、彼らの研究グループにいた武谷三男の、本質論、実体論、現象論の階層で事象を把握する「武谷三段階論」(武谷1995など)である。現象と本質をつなぐ実体というレベルを意識したからこそ、湯川の間接子論は着想できたのだと、武谷自身がその多くの著書で語っている。

まず、この武谷三段階論は量子力学、理論物理学にとどまるものではなく、経営学に関する事象(さらにはさまざまな社会現象)の分析や認識にも有効な方法ではないかというのが、第一の問題意識である。

次に、経営学の世界における理論的なアプローチと実証的なアプローチが、三段階論で見れば異質なのではなく、相互連関的ないしは相互補完的なものではないかというのが第二の問題意識である。

さらに、次のような問題意識も有している。すなわち、コンピューターによるデータ解析が容易に実行できるようになった結果、経営学に限らず、経済学など社会科学、人文科学の分野で横行している定量データによる実証分析の多くには、単なるデータの取れる表面的な現象の記

述ではないかという釈然としない感覚が付きまとう。また、反対にそのような感覚から定量的なアプローチ批判を背景のひとつとする定性的なエスノグラフィによる記述にも、やはり同様な不全感が存在する。それぞれ重要なアプローチであることは理解しながらも、何故か付きまとうこれらの不全感を、この三段階論(あるいは段階的位置づけの明確化)が解決してくれるのではないかというのが第三の問題意識である。

1. 代表的な三段階アプローチ

三段階アプローチは、武谷の他にもいくつか見ることができる。代表的なものとして、宇野弘蔵の経済学方法論における、原理論、段階論、現状分析の「宇野三段階論」(宇野1965など)が上げられるだろう。これらの過去の業績に着想を得て、近年では青木昌彦が、経済の制度分析の分野で、普遍性、形態論、現状分析の三段階アプローチの必要性を訴えている(青木2008)。また、自らは三段階論を主張していないものの、伊丹敬之『経営戦略の論理』(伊丹2003)で示した枠組は、市場、インターフェース、内部の三つの適合を論じるもので、やはり三段階論のグループに入れることができるだろう。

1. ではこれら複数の三段階論の内容を確認し、2. においてそれらの普遍的なものとして武谷三段階論の内容と枠組を再確認したい。

1.1 伊丹戦略適合論

今回の筆者の問題意識と近接している三段階論は伊丹のそれである。かれは、良い戦略には論理があり、その論理とは三つのレベルにおける適合であると述べている(伊丹2003)。

第一の段階は「市場適合」である。顧客にその

※ 青森公立大学教授

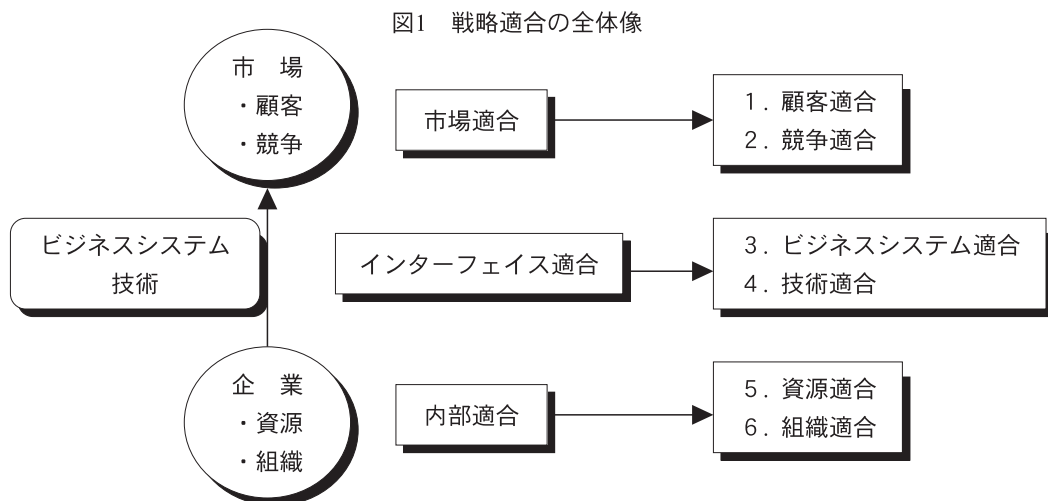
価値を評価されていること（顧客適合）、また他社に対して何らかの優位性を形成していること（競争適合）をその内容とする。経営の成果、その背景にある戦略の成果は、市場という場で実現されるものであり、これがすべての始まりであると同時に目的でもある。

第二の段階は「インターフェース適合」である。市場での適合のためには、企業の持つ内部資源と市場を結ぶ、優れたインターフェースの存在が不可欠である。これを「インターフェース適合」と呼ぶ。これは実際に事業上の仕組みにかかわるもの（ビジネスシステム適合）と、価値

を作り出す仕組みである（技術適合）から構成されている。これらは市場適合という成果を生み出すための手段に関する議論である。

第三の段階は「内部適合」である。内部とは企業の内部を意味し、企業内の資源や資産（資源適合）、さらには組織風土（組織適合）を構成要素としている。

伊丹自身はこれらの適合をあたかもそれぞれ独立した適合のように論じている。しかしこの三段階は、内部資源をインターフェースを通して市場での成功という現象に結びつけることを論じる枠組と見るべきだろう。



資料：伊丹敬之『経営戦略の論理 第3版』（P25）

1.2 青木社会科学統合論

青木は経済と制度の相互作用を論じ、社会科学統合を目指す上で、武谷三段階論、宇野三段階論のような三段階アプローチがありうるのではないかと述べている（青木2008。P264-265）。

すなわち、アメリカと日本は同じなのか、違うのかという無限の論争はこの段階を踏まえない議論なので混乱していると指摘し、次のような議論の整理の仕方を提案している。

「制度をゲームの一つの均衡として考えれば、なぜ制度が生まれ、維持され、進化されるかということにかんし、本質的、統一的な考え方がつかめる。」（中略）

「その上で形態論として、いろいろなドメイン（領域）、例えば政治というドメインではどういう制度が生まれるか、を考える。」「経済のドメインでも（中略）アメリカ的なトップダウン型の組織構造も有れば、日本に一般的に見られる（中略）ライフタイムのコミットメントを重視する組織慣習が生まれたりもします。（中略）それぞれのドメインに起こる均衡は一つではありません。」（中略）「政治の分野でできる均衡、経済の分野でできる均衡、社会交換分野でできる均衡のそれぞれに多数の可能性があり、それらのどれが選ばれるかは、そういう分野間の相互補強関係で決まってくる。制度研究の世界では『制度

的補完性』といいます（中略）。アメリカにはアメリカ型の、アフリカにはアフリカ型の、日本には日本型の制度のクラスター（集合）ができるということです。」

「（中略）その上に立って、一定の制度をゲームのルールとした現状の分析を行い、どのような政策が有効であるのかわからないのか（を議論すべきだろう。）」

このような観点から、アメリカのイラク戦後処理の失敗を、形態論の一つでしかないアメリカ型を普遍と取り違え、これがどこでも通用すると

考えたところに誤りがあるとしている。

つまり、普遍的、本質的な議論の上に、制度補完性を背景とした多様な均衡があり、これらを踏まえなければ現状は理解できないし、有効な政策も打てないのである。普遍論・本質論、形態論、現実論（現状分析）の三段階のアプローチが有効だとしている。これは同様に、市場原理という、抽象的で、普遍的なモデルでしかないものを、どんな国のどんな状況にも適用すべきであるとする市場原理主義の考え方の批判にもつながるものであると解釈できよう。

表1 社会科学統合の方法論

段階区分	プロセス	特 質
本 質 論	本質的、統一的考え方	普遍的な議論
形 態 論	各ドメインで制度の生成を検討	各タイプの制度クラスター
現 状 分 析	現実の個別制度における分析	タイプ別ルールによるメカニズム

注：本質から形態を媒介して現状分析する論理の流れである。逆を排除してはいない。

資料：青木（2008）より作成

1.3 宇野経済学方法論

西欧の資本主義とは多くの点で異なる日本資本主義の規定を巡る、講座派（未完な資本主義）と労農派（残滓）による日本資本主義論争の中で、宇野弘蔵が独自のマルクス経済学研究を通じて確立した方法論である。産業資本主義イギリスをベースに理論モデルとした純粋資本主義の分析を通じて経済の概念及び基本のメカニズムを規定する原理論、資本形態の歴史的変化に対応した段階論、これらを踏まえた現実経済の分析である現状分析の三段階から構成される。

このことにより、日本資本主義は、原理論レベルでは資本主義として普遍性を持ちながら、段階論レベルでは金融資本主義段階としての歴史的特殊性も有しているが、現状分析段階では、地理的、歴史的特殊性から現実には異なった経済として記述される。しかしこの最後の現状分析の記述は、普遍性、段階性を踏まえているから記述できるものであり、この段階の認識抜きには分

析できない。言い換えれば、現状分析をするためには、普遍的な原理論、それを踏まえた歴史的な段階論の理解を踏まえ、その特殊性を把握することが重要であるということであろう。

宇野及び宇野学派は、このある種洗練された方法論と、イデオロギーフリーという立場を明確にしてきたため、1960年代は勿論、70年代を通して、東大における経済学主流派として君臨してきた。しかし、宇野学派経済学者は、マルクス経済学に限定した方法論として議論し、同時に主流派経済学を、宇野自身が「俗流経済学」の一言で切り捨ててきたため、主流派経済学方法論への応用の道は閉ざされ、マルクス経済学の退潮とともに、この三段階論も経済学あるいは政治経済学の世界から消え去ろうとしている。

（注：上述の青木が社会科学統合という視点で取り組もうとしており、内容を変えて生き残る可能性が残されている。）

表2 経済学研究における三段階論

段階区分	プロセス	特 質
原 理 論	純粋資本主義社会（3階級モデル）	資本の本質的運動法則
段 階 論	商業、産業、金融各資本主義段階	各型資本の歴史的発展と運動法則
現 状 分 析	各国の具体的な経済	具体性、特殊性の分析

注：一般に原理を出発点として、段階を媒介して現状を記述することが多い。逆に現状から本質もあり。

資料：宇野（1962）より作成

2. 武谷三段階論

武谷三男は、2000年に89歳で世を去った。彼は生前、素粒子論を専門とする理論物理学者で、第二次世界大戦中の41年に理研に勤務し、関西の湯川グループ、関東の仁科グループという、当時最先端を形成していた素粒子研究の要となる二つのグループの掛け橋となった研究者であった。それとともに43年には陸軍航空本部の要請で原子爆弾の研究を担当した人物の一人である。しかし原爆の研究をはじめてわずか数ヵ月後に、思想犯として特高警察に拘束され、結局原爆の開発には到らなかった。（武谷1998）

彼は素粒子研究をはじめとする研究の中で、認識あるいは適用のための論理学として三段階論を確立する。「人間の認識というものが論理的にいうと、先ず現象的な認識があって、そのつぎに実体的認識が行われ、それによってはじめ、本質的認識に進むという三つの段階で認識がすすむ。そしてかならず実体論的認識が、媒介されなければならぬ。それが認識の発展のひとつの本質的な過程である。」（武谷1969。P253）と述べた。繰り返せば、認識には本質、実体、現象の三段階があり、必ず実体の媒介が必要である、ということ述べている。

2.1 物理学の方法論、自然認識・科学の方法論

武谷自身が言っているように、この論理学は物理研究の中から生まれた。すなわち、マッハやカッシーラという自然哲学者たちが、混乱した物理現象に直面した時、「現象をとにかく記述

するのが物理学である」といったことへの反発から生まれたものである。混乱した物理現象とは、量子力学ではニュートン力学が通じないという問題に直面して、素粒子が示す不思議な、なぞのような現象をただ記述していても、壁が次々に出てくるだけで何ら本質に到ることはできないという体験から発している。

（1）基本的枠組

まず、「『現象論的段階』は、（中略）古代エジプトのように、（天体の運行という）現象を観察してそれを記述する段階。『実体論的段階』は、ギリシャの科学者のようにそのような現象が起こるしくみを考え、目の前の事実を秩序建てて整理してみる段階。『本質論的段階』は、普遍的な原理や法則といったものを見出し、それによって現象が説明できる段階」（武谷1998。P97）である。すなわち、天体の運行という現象をまずは観察するのが現象論的段階で、ケプラーやガリレオが望遠鏡でさらに星と星の間の動きや距離を測定してその構造を解明していった段階が実体論的段階、そして最後にニュートンが、これらの天体の動きをニュートン力学、つまり万有引力の法則で説明できるようになる段階を本質論的段階と呼ぶ。

科学の立場を認識の立場、したがって現象から実体を媒介して本質に到るプロセスととらえており、技術の立場を適用の立場、したがって本質を、実体を媒介させて現象を生じさせる行為ととらえているように思える（武谷1969。P255）。しかし、本質論的段階に達すると、未知の天体で

あっても実体論を媒介させることによって、その動きが予測できるようになる。この予測は技術と異なる、科学の立場での適用ということになるのであろう。

(2) 鍵となる実体論

武谷三段階論の中で最も重要な段階が、現象を本質に媒介する実体論の段階である。著作の多数の箇所、「何らかの形で実体論的な見方というものがどうしても土台にならなければ認識は発展しないというのが僕（武谷）の持論なのです」と彼は言っている。

天体が光るということは、「何があるか、どういうふうな構造になっているか」というような関係の認識、典型的に言えばギリシャの円軌道を原理にしたものからケプラーに到るまで」の考え方を実体論的な考え方といている（武谷1970。P19）。つまり、現象を生じさせている要素たちは何か、それはどのような仕組みと構造を有しているか、という点を明らかにするのが実体論である。この段階を介在させることで、現象と本質の間を埋めることで、現象から本質への到達を可能にするわけである。

表2 物理学研究における三段階論

段階区分	プロセス	特 質
本 質 論	理論モデル	普遍的法則
実 体 論	要素と構造と仕組み	運動法則
現 象 論	物理現象	現象・現実

注：一般に出発点は現象であり、実体を媒介して本質に到るプロセスである。

本質を用いて実体を媒介させ現象の予測という逆のプロセスももつ。

資料：武谷（1998）などより作成

2.2 武谷三段階論の方法論としての普遍性

各三段階論を比較検討しながらその異同を分析することを通じて、素粒子論という特殊分野、そして最古参の一つである武谷三段階論が、意外にも各論者との共通性を有するとともに普遍性のある論理である事を見ていきたい。

(1) 武谷と宇野・青木との共通性と相違

宇野三段階論の形成過程が先行しており、これと時期的には重複する時期がある。しかしお互いを認識しあった上で影響しあったとは思われず、両者は独自の研究プロセスでそれぞれ三段階論に到っていると思われる。それぞれの三段階の両端が、本質と原理、現状と現象などという概念は極めて類似しているし、第二段階を第一段階と第三段階の媒介として重視する点では共通している。しかし第二段階の内容に関する規定は大きく異なる。宇野は歴史的な段階とし

て媒介する段階を把握しており、武谷は、それを各要素がどのような構造の中で運動するかという視点でとらえている。

論理の発展プロセスという点で、分野が異なっても共通するものの、自然科学では歴史に該当する概念が希薄であり、逆に社会科学では歴史的な発展段階は重視せざるを得ないため、自然に媒介する段階の内容は異なってきたのである。

決して演繹に限ってこの論理を用いているわけではなく、現状分析から段階を経て原理に到る認識の回路も論理的には存在するが、宇野の場合は原理から段階を媒介して現象を記述するという演繹的色彩が強い。この点は、武谷が認識論として論理を用いているのと逆の方向への適用に重点がある。

青木はその著書でも述べているように、彼の三段階論は武谷と宇野を参考に提案されているの

で、当然両者に類似している。媒介である第二段階は、形態論として、政治、経済、社会などの各領域の要素が、その国特有の補完関係を形成しながら制度を形成すると言う視点なので、歴史段階という宇野よりもむしろ武谷のそれに近い。しかし、論理の方向性は、宇野同様、本質から現状に到る方向を主としているようである。

(注：ここでは詳述しないが、武谷の媒介の実体を各要素が構造の中で運動する時間軸に沿ったプロセスと理解するなら、これもミクロな歴史である。その点では同一ということできるかもしれない。ただし、要素と構造は宇野の体系では原理、段階、現状の各段階で論じられるものである。)

(2) 武谷と伊丹との共通性

伊丹は、その立論において、恐らく宇野も武谷も全く意識していないだろう。彼の経営戦略の論理を追求する中で、自然に三段階論的なものが形成されたのだと考えらでれる。したがって、彼には三段階アプローチという認識はないだろう。彼の『経営戦略の論理』にインターフェース適合という媒介の段階が入ったのは、2003年の第3版からであり、初版、第2版は、内部適合と

市場適合を論じていた。宇野、武谷が強調しているのと同様に、この二段階論では議論の展開自体は不可能ではないが論理整合性に無理が生じたものと想像できる。したがって議論が進むにつれ、自然な発展形として実体的要素を持つ媒介のを加え三段階になったものであろう。

市場での成果、市場適合というところから出発して、インターフェースを媒介して、資源・資産に到る論理の方向性は武谷と共通性がある。

その意味で、経営学においても、三段階アプローチ及びその論理の流れの方向性がきわめて自然な論理プロセスであることを示していると言ってもよいのではなかろうか。

なお、内部適合（資源・組織適合）が、いわゆる本質、原理といえるのかと言えばそこには依然として違和感があり、武谷と同一と言い切るのには無理がある。また、伊丹においては各段階というよりも各適合は独立した存在として記述されている点にも注意を払うべきであろう。

3. 経営学方法論としての三段階アプローチ —— ひとつの試論

3.1 武谷三段階論の可能性

武谷三段階論は、物理学を適用対象としたものであったかもしれないが、それ自体は抽象性の

表3 各三段階論の比較

区 分	第一段階 (抽象・普遍)	第二段階 (媒介)	第三段階 (具体・現実)	特 質
武 谷	本質論 (普遍法則)	実体論 (要素と構造)	現象論 (現象)	帰納的
宇 野	原理論 (普遍法則)	段階論 (歴史段階)	現状分析 (現状・実態)	演繹的
青 木	本質論 (普遍法則)	形態論 (多様制度補完)	現状分析 (現状・実態)	演繹的
伊 丹	内部適合 (資源・資産)	インターフェース適合 (ビジネスシステム)	市場適合 (戦略)	独立的

資料：井上作成

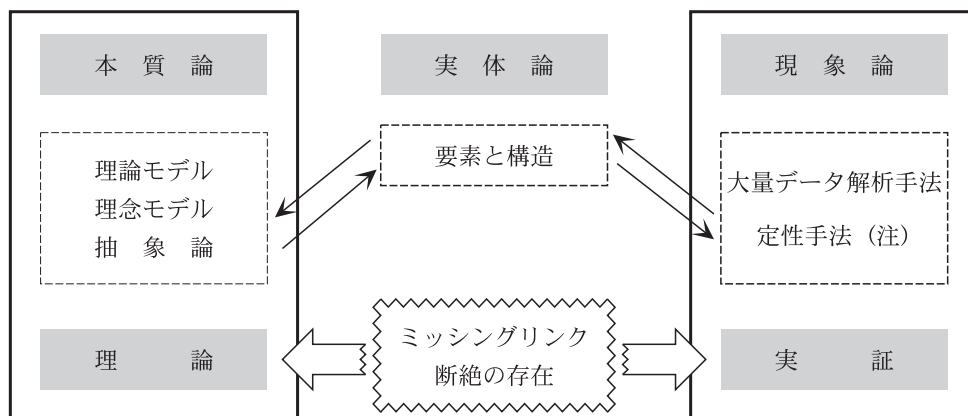
高い概念枠組であり、物理学の方法論に止まるものではない。現象を観察して本質的理論に到達することは、経営学、経済学をはじめ様々な社会科学、人文科学にも共通した問題である。

しかし、これらの分野では、今日、現象の記述が先行し、本質が見えにくくなっている議論も多いという問題が散見される。これらは、武谷の言う物理学における前世紀始めのマッハやカッシーラの論説の横行といってよいかもしれない。本稿の関心領域である経営学においても、大量のデータ解析による現象の記述をもって実証分析とし、また文化人類学の諸研究から影響を受けたエスノグラフィの手法により現象の記述が詳細になされることが見うけられる。これらの研究の

中に優れた研究もある半面、結局、常識的な結論を確かめるためだけとしか思えない作業があることも事実である。これらのすべてを現象論的段階と切り捨てるのは極めて乱暴であるが、そう決め付けざるを得ないものが多数存在している。そこに共通しているのは諸要素とそれらの関係では構造を記述した実体論が欠けていて本質に到っていないという点である。

このような議論に、実体論的な段階を導入ないし媒介してやることにより、単なる現象論的記述に止まるものなのか、本質論に到る重要な議論なのかということが識別できるであろう。本質論に到ることが可能であれば、経営学の深化と進化に寄与できることになる。

図2 経営学における理論と実証の分断



注：定性手法とはエスノグラフィ、グラウンデッドセオリー等をさす。
資料：井上作成

3.2 ひとつの適用事例

武谷三段階論を経営学に適用するという念仏を繰り返していても意味はない。経営学研究における実体論段階とは何かを明確にすることが肝要である。本稿でそのすべてあるいは一般型を提示することはできないが、筆者が体験した実証研究を素材に、経営学研究での三段階アプローチ、実体論的段階の考え方を述べてみたい。

筆者は、地域企業の新製品開発プロセスの実証研究、すなわち、その企業にとって、顧客関係、

技術関係のどちらからも独立、断絶した、その意味で画期的な新製品開発に成功した企業の開発プロセスを研究している。この研究の作業プロセスは下記のとおりである。

- ① 開発にかかわった人々に開発のプロセスについて多頻度インタビューを実施する
- ② これを時系列に整理して年表を作成し、歴史を記述する (ここまではエスノグラフィ的)

- ③ 開発段階別（企画、機能、構造、詳細）にキー資源の出所を明確にする
- ④ 段階別のキー資源の内部化プロセスを明らかにする
- ⑤ 内外の相互作用と製品化成功の構造的な関係を分析する（ここからはモデル化の過程）
- ⑥ 地域企業の製品開発成功の理論モデルを構築する

これを武谷三段階論的に再構成すると、現象論段階とは①から③にかけての作業である。この段階での記述は開発史としての成果と考えられるが、整理や評価があるとは言え、あくまで現象に関する記述である。実体論的段階とは、各要素と構造について意識的に整理、再構成した、③から⑤にかけての作業がそれに当たるであろう。本質論的な段階とは、モデル化に結びつく部分である。まだ完全に完成した内容にはなっていないが、⑤から⑥にかけての段階がそれに当たるだろう。「現象論的な段階から実体論的な段階、それから本質論的な段階－形式的に分けるのでなしに－こういうモメントを媒介にして発展している」と武谷も言うように、実体論的段階と他の二段階との境界がはっきり分かれているわけではない。実体論は現象論を出発点にし、その一部を含みながら進めることになるし、実体論を進めていけば連続的に、モデル化ないしは本質論に進んでいかざるを得ない。

ここで強調すべきは、事実の観察から本質的なモデルに飛躍することはできないということである。事実を観察した内容を、要素とその構造にかかわる再構成が必要であり、この作業がまさに実体論である。これ抜きか、不十分なままに現象と本質をつなぐこと可能ではあるが、不完全な研究に終る。あるいは、この実体論の成否が本質論の成否を決めるといっても良い。

逆に、理論モデルが先にあって、それを現実に応用する場合に、直接これを適用することはできないということも意味している。この点も重

要な論点であるが、本稿ではこれを掘り下げることはせず、別の機会に譲りたい。

おわりに

理論研究と実証研究の相互補完性と相互連関性への示唆、量的・質的データによる現象記述の本質論への展開方法の示唆を問題意識として、三段階アプローチ、特に、実体論の媒介を重視する武谷三段階論の普遍性と有効性を検討してきた。

諸データ解析や実証研究の中で、あくまで現象の記述に止まり理論研究へと展開できないものがあるのは、実体論的段階が貧困であることにその要因がある。実証研究それ自体が問題ではなく実体論の欠落にその要因がある。今回は十分議論する余裕はないが、理論が現実の経営に十分反映できるか否かも、実体論的段階を媒介させることができるかどうかにかかっている。

すなわち、理論と実証（ないし実態分析）は、この実体論というミッシングリンクを回復することでそれぞれの役割が明確になり、それぞれの意味と位置を明確にした上で学問的統合が可能になると考える。

（2009年6月15日受付、2009年6月24日受理）

参考文献

- 青木昌彦『私の履歴書 人生越境ゲーム』2008年、日本経済新聞出版社
- 伊丹敬之『経営戦略の論理 第3版』2003年、日本経済新聞出版社
- 宇野弘蔵『経済学方法論』（経済学大系1）1962年、東京大学出版会
- 武谷三男『科学と技術』（武谷三男著作集4）1969年、勁草書房
- 同『自然科学と社会科学』（武谷三男著作集5）1970年、勁草書房
- 同『罪つくりな科学 人類再生に何が必要か』1998年、青春出版社（著者50音順）

An Essay on Three-layer Approach as Methodology for Management Studies

Ryuichiro Inoue

Abstract

Three-layer approach was created as methodology of theoretical physics by Dr. Mitsuo Taketani, one of leading theoretical physicists after the World War 2. He told to support Dr. Hideki Yukawa to have built up his meson theory with his three-layer approach. Dr. Yukawa received Nobel prize with this theory in 1949.

Taketani's three-layer approach consists of essential level, substantial level and phenomenal level. This approach has universal effectiveness not only for theoretical physics but also for many sciences includes economics and management.

Unfortunately, there has been a kind of disruption between theoretical research and empirical research in management studies. Three-layer approach can contribute to reconstruct linkage at the place of "missing link" between them. In this approach, substantial layer is the most important. It enables us to reach essential level from phenomenal level through clearing factors and structures on substantial level.